

背に月

桂川 ほたる

仏事の席に彼女がいるだけで、場の雰囲気が締まると言われた。
人々から尊敬の念を込めてオンバアサマ(御婆様)と呼ばれる所以である。

山寺の参道に続く曲がりくねった細道の途中、開けた部分の山腹に、拝み屋の庵はあった。

わさび屋の看板を過ぎると、オンバアはウウンと声を出して腿をさすり、タクシーの中で固くなってしまう足の筋肉を動かす準備を始める。同じ姿勢でじつと座っていると、目的地に着いてドアが開いても、すみやかに一歩が踏み出せずに、降車に手間取るからだ。

催事道具一式が入った風呂敷包みを持ち、オンバアの身の回りを気遣うのは愛弟子のトツコ、中学二年生だ。彼女にとつてこの家が家庭であり、修行の場である。実弟と暮らすオンバアには血縁の跡継ぎがない。この家にとつてトツコは、仏様からの大事な預かりものである。

自宅近くでタクシーの助手席から降り、トツコは

一、御婆様の弟子

オンバアは拝み屋を生業(なりわい)としている。葬式や法事の席でお経を唱える仕事だ。修行を積んだ僧ではないが、お吊いの俗習に欠かせない存在である。特にオッサン(住職)を頼むほどの大きな席を設けないとき、座の中心になって仏事を仕切る。

口許に色素の抜けた疣(いぼ)状のほくろ。広い額、深い皺の間に埋まった一重の眼。真つ白な髪を椿油で撫で付けてきりりと曲げに結び、リウマチのため外側に湾曲した膝を南天の杖で支えてどこへでも赴いた。加齢につれて小さくなっていく体躯に似合わず、長いお経を腹に響く太い声で朗々と唱える。

ひらけた視界に星の瞬く空を仰ぎ見た。翻って後部座席にまわり、オンバアの手を支えて降車を介助すると、車内で預かっていた杖を手渡し、街灯もない暗い足元を案内する。

土手の木々は庵の軒までも枝葉を伸ばし、屋根は落ち葉に覆われている。時々オジイが思い出したように枝を切ったりするが、茂る方が早くてじき元通り覆い被さる。

山の上の自宅までタクシーの乗り入れを頼むようになったのは、オンバアのリウマチが悪くなったほんの一年前からの事だ。それまで、タクシーは贅沢な乗り物という認識だった。たまに、お金持ちの家で手配してくれたら有難く乗っていたが、きれいに磨いた車が悪路で泥だらけになると申し訳ないから坂の下の、舗装道路が切れたところで車を降りていった。

オンバアは、未舗装の狭い山道を乗用車で走るのは気の毒だと言って、必ず車のテールライトに向って頭を下げた。

「お師匠さん、昨日も、一昨日も。今月はお勤め、多いですね」

「ふんとに、な。今年は特別暑いからなあ」

トッコはどうもこの頃、オンバアの顔色が優れないのが気になっていた。起きていれば首が小刻みに左右に振れ続けるのも、最近になつてからだ。

持病のリウマチの悪化に伴い、体力も目に見えて衰えてきている。歩くのも狭い歩幅でゆっくりしか歩けない。難聴も老眼もすずんだ。又、暑さで食が細っているとところへ、強い薬の副作用で胃も悪くして、あっさりしたものをほんの僅かしか口にしなければなっていた。そんなふうでも、オンバアは頼まれれば頼まれただけ仕事を引き受け、どれもけして手を抜く事はせず、お勤めを果たすのだ。

人がひとり没すると七日毎夜に般若心経をあげる。酷暑、厳冬期は重なることも多い。体力がないと、掛け持ちは難しい。

読経が済んだ後もオンバアは、小さい子供の居る若い夫婦が、慣れないお吊いの段取りや困ったことの相談に乗って、身内のように一々応えた。車に乗

り込む時、今になってすすり泣く人や頭を垂れて見送る人々にゆっくりと一礼した。

走り出した車のバックミラーを見ていたトッコが見送りの人は「家へ入りました」と知らせると、オンバアはようやく後部座席の背凭れに深く体を預ける。ぐったりと疲れて、車の中で眠ってしまうこともしばしば。声の良いこと気丈なこと、優しいこと、また少し頑固なところまで、全てお手本の師匠であった。だから尚更、トッコは心配なのだ。

丸い玄関灯に集まった虫を手で追って引き戸を開け、立ち止まって待つ。敷居のすぐ内側の土間のモグラが掘り起こして柔らかくなった不安定な箇所を踏まないよう、よく見て誘導した。

オンバアは南天の杖を軸に足を上げ「よいしょ」と言う。厚みのある華草履(はなぞうり)を履いた足が、高さ七センチほどの敷居を跨ぐほどに上がらなかつた。つまづきそうになるも、トッコがすばやく支え、戸にしがみつく。はずみで、曇りガラスを嵌めた引き戸が大きくガタンツと鳴った。

「おうっと」

「大丈夫ですか、ここに掴まってください。はい、草履」転がった杖と、脱げた履物の埃を払って差し出す。

「うん…。だめだな、こんな所で転けては」
「暗くてよく見えないから…」

奥の部屋の明かりがついて、軋む廊下を玄関に向ってくる音がした。片足を擦って歩く不規則な音は、オジイの足音だ。扉をガタガタ鳴らしたから気付いて起きたんだ、オジイは朝早い仕事なのに、申し訳ないとトッコは思った。「ただいまあ」と、遠慮がちな声で奥へと呼びかける。

「何だ今の音！ 姉え、倒れたか！」

寝巻き姿のオジイが玄関に出ると、オンバアは上がり框(かまち)にちよこんと座り、トッコは外れた引き戸をレールに乗せ直しているところだった。引き戸を左右に動かし戸車の調子を見ながら、「ごめんなさい。起こしちゃいました」と言った。

「ああ、そうか。戸が外れたか、びっくりした」

「はい、ただいま」オンバアはオジイを見ると、とても柔和で無防備な表情になる。

「今、ちよつとよろけただよ」

「大丈夫か」

「お師匠さんはお勤め、頑張り過ぎです。もう少し断つた方がいいのに」

トッコは屈んで、オンバアの足袋のコハゼを外す。

「晩飯、食べたかね」オンバアは足袋を脱いで解放された足をゆり動かしながら、オジイに言った。

「おう」

オンバアは丸い顔でニコニコと頷く。

「私はお師匠さんの体が心配で」と、トッコ。

「全くだ。姉えは、青いような顔をしてひよこひよこ出掛けて、気が気じゃない：」オジイはオンバアが立ち上がるのに手を貸しながら、「なあ、トッコ。お前はもう十分やれるんだらう？ どうだね、そろそろ」と、こちらを見据えた。

脱いだ履物を揃えるトッコの代わりに、オンバアが答えた。

「わしもそう、思つてたとこさ」

ふたりに注目され、トッコは瞬きもせずきよとんとしている。

「着物も先代から継いだのがちゃんとしてある、なあに。誰に言われんでも」

トッコは会話の意味を瞬時に察して、慌てて顔の前で手を左右に振った。まさか。自分ひとりで拝み屋のお勤めに行くなんて？

「え、そんな、無理ですよ」

「何を遠慮しているか。段取りも出来る。お経も読める。もうひとりで良からう」

「遠慮なんて。してない、してないです」

これまで、金持ちの年忌で大勢拝み屋を呼んで頭数を揃える時、トッコは他所の同業者の弟子達と一緒に借り物の衣装で座に並ぶことはあった。だが、如何せんまだ小娘と下に見られて信望がない。心得るべき事は一通り仕込まれているものの、今は現役のオンバアを柱に成り立つ生活、本番のお鉢はまだまだ回つてこないとのんびり構えていたのだった。

「呼ばれた先で叱られますよ。御婆様は半人前の子供を寄越したつて」

「誰だつてはじめての時があるもんだ。姉えだつてお前さんくらいの頃に独り立ちしたんだよ」

翌日、トッコが学校から戻るとオンバアから早速、お勤めの身支度のために部屋に呼ばれた。

桐の和ダンスの抽斗（ひきだし）を引くと、キイツと掠れた音を立てた。オンバアは着物を包んだ畳紙（たとうし）を出して、正座したトッコの前へ押しやる。樟脳の匂いがふんとした。トッコは唇を一字に結び、紐を解き包みを開くオンバアの手元を見詰める。

ねずみ色の紋付の着物と繻子の黒い帯。黒い帯締。襦袢に腰巻、腰紐と足袋、オンバアは着付けに必要な一揃いの小物を、次々と目の前に広げていった。

「しつかりな。一生懸命で拝んでやれば、仏さんはこの世との未練を断つて、すつかり安堵して逝けるんだよ。拝み屋はそういうお役目よ」

「お師匠さん」

「仏さんはお経を頼りに極楽へ導かれるだから」

「でも、本当に自信が無いです……」

オンバアは目を細め「やれるさ。うちのトッコだもの」と、微笑みながら着物の仕付け糸を取った。

トッコは扇風機の風で飛ばされた糸くずを拾う。

着物を合わせてみると、採寸された覚えもないのに、身幅も衿（ゆき）の長さもびつたりだった。オンバアは知らぬ間に、呉服屋へ仕立て直しを頼んでいたのだ。

きりりと帯を締めると、いっそう身の引き締まる思いがした。黒い帯上げは、結び目をぐっと帯の中に入れ込み、帯からあまり出ないようにする。帯の上から軽く叩いて馴染ませると、オンバアはちよつと離れて着付け具合を見た。

「これを一人で出来るように。練習だな」

「はい」

次にトッコを年代物の鏡台の前に座らせて肩に手拭いをかけ、皺だらけの掌に広げた椿油を愛弟子のおかつぱ頭にすりつけた。柘植の櫛で髪を梳き、七・三に分け目を入れる。

髪を梳（す）かれながらトッコはうつとり目を閉じた。耳に近づくオンバアの息がかかる。温かい息遣い。オンバアの匂いは、懐に入れた白檀の香袋の匂い。

後ろから鏡を覗き込んだオンバアは、満足げにひとつ頷くと、肩の手拭いをさっと取り去った。

「出来たよ。見てやって」襖を開けて、向うにいるオジイに呼びかけた。

オジイはトッコを見るなり、「おう、おう。いっぱいしの拝み屋さんだ」と、まなじりを下げた。

「初めてだから、竹下の分家はどうかね」

「そうだな。それがいい。あの家の人は良く知っているから」

「わしは岡の下の八百屋へ行く。方角が違うもんで、トッコ、帰りは別になるけんど大丈夫だな？」

「はい。あ、でもお師匠さんは私がいなくて困らないですか？」

「八百屋から迎えを寄越すと言われている」

オジイも「お前は心配しないで良いよ。姉えには杖があるしな」と言った。

「わしが行く家を減らして、お前さんの方を増やしてく。段々に。そうしてやれば無理はなかるう」

トッコは手を付き、かしこまって頭を下げた。肩に手を置いて励ましてくれるオジイ。トッコは

両の口角を上げてみたが、唇がひとりでにびくびくと震えて上手く笑えなかった。その責任の重さは、まだおぼろげで想像の域を出ないのだが。

「これからもよろしくお願いします」

今はただ、それだけ言うのが、精一杯だった。

二、ばらのハンカチ

一人で居ると、なんとなく物寂しい日。

トッコは竹で編んだ小振りの行李（こくり）の中から、ハンカチーフを取り出し、絹の温みのある滑らかさに触れた。大事にしている思い出を、そつと辿り返すために。

トッコが幼稚園にあがる頃のこと。

オンバアは三月のお彼岸で沢山の家から頼まれていたが、忙しい仕事の合間に、トッコの持ち物の名前付けをしてきていた。幼稚園から渡された書類に、通園に使う袋は手作りで、と書かれており、手

提げと巾着袋の作図が添付されていた。

オンバアは端切れをうまく組み合わせ、寝る間を削って袋を作った。裏地は家に沢山あった紫のぼかしの風呂敷を利用し、仕上げに市販のアップリケをアイロンで付けた。布は渋い色だったが、トッコはうさぎのアップリケがとでも嬉しくて、幼稚園で使うまで、ままごと道具を入れて家の中で持って歩いたものだ。

しかし、そうしてひとつずつ準備していった幼稚園の必需品の中に、トッコもオンバアも知らなかったのだが、余所の家の子はみな既製品を使っていた品があった。

ハンカチである。

幼稚園の女の子たちは、可愛らしいリボンを付けた少女の絵や、ドレスを広げたお姫様のハンカチを出して、度々見せ比べあっていた。

トッコが持たされたのは、幼稚園からのお便り通りの寸法に切った機能重視の手拭き。白い晒のふちを縫い、右下隅に木綿糸で名前を縫い取りしてある。みんなが騒ぎ品評し合う中、トッコは手拭きが入

っているポケットに手突っ込んだまま、手を出せなかった。もちろん質素な生活が信条のオンバアに見せつこするためのハンカチを買ってくれとはとても言えない。

そんなある日のこと。幼稚園からの帰宅途中、きれいにお化粧をした知らない女の子の人が、児童公園の前に立っていた。その人は手招きして、トッコに赤いバラの花柄のハンカチを広げて見せるのだ。それが、高価な大人物のハンカチである事は、小さいトッコにもよく分かった。

「きれいなハンカチ……」

その人からか、ハンカチか、強い匂いが漂う。

パーマをかけた髪をふっくらとした曲げにして、ハイヒールを履いている。ハンカチをつまんだ指先は、見たことのない赤い爪だった。

「あげようか？」思いがけなく女の子の人は言った。

知らない人に物を貰ったらいけないと、教わっていた。しかし、美しい柄に目を奪われて警戒心が薄れる。それでも、最初のうちは迷って、ハンカチの前を行きつ戻りつした。

相手はそれを気にした風もなく親しげに、声を掛けてくる。見せてもらうだけなら、ちよつとくらいは。トツコは女のひととの距離を少し、詰めた。

広げたハンカチを、離れた所から覗き込むように見せてもらった。そして他にも、彼女が身につけているキラキラ光るネックレスや、指輪などの美しい装身具がトツコの興味を引いた。ハンカチのおぼちやん。彼女のことをそう呼んだ。

促されるままベンチに座ってアクセサリーを見せてもらおう。だんだん打ち解けて仲良くなって、ついつい一緒にブランコに乗り、はしゃいで奇声を上げてしまうほど。

その日は、家まで辿り着かないうちにお寺の鐘が鳴った。あれはオジイが撞いている、午後四時の時の鐘。寄り道をして遅くなったと自覚しているから、早足で帰って来たけれど、胸がドキドキする。道草くって叱られるなど、トツコは思った。

自宅の戸を開けて、ちよつと控えめに「たぐいま」と言った。だが、オンバアの返事は無かった。

見回すと、土間の吊り金具にいつも掛けてある背負子(しよいこ)が見えない。少し離れた山に畑を借りているからそこへ行つたか、焚き付けの枯れ枝を拾いに行つたに違いない。

ちよつとホツとすると今度は、いつまでも消えない香水の移り香が、急に気掛かりになった。

直ちに線香を焚き、煙を手で自分の方へ煽って、移り香を誤魔化そうとする。

間もなくオンバアが帰り、仏壇の前のトツコを見て、「感心にお経の練習をしているな」と褒めてくれるが、隠す気持ちがあるから、トツコは大変後ろめたい。

翌日トツコは、机の上に自慢げに並べられた友達へのハンカチの隣に、持参した美しいバラの花柄のハンカチを並べた。

「お母さんのハンカチ持ってきたでしょ」

友達の方が言った。親の持ち物を勝手に持つてきて狡い、と騒いだのである。

友達の言葉が、トツコの胸にチクつと刺さる。「違つ」とだけ言った。

幼稚園の先生がそれを見ていた。

事情を知らないタツコ先生は、トッコを呼び出し、万引き疑惑の取り越し苦労までして、ハンカチの出所を根掘り葉掘り尋ねたのである。オンバアのハンカチとしても、派手すぎると思ったのだろう。

トッコはあまり気が進まなかったが、身の潔白を晴らすために、ハンカチのおばちゃんのことをすっかり話す羽目になった。しかし、幼稚園の先生を案内して行った児童公園に、昨日のおばちゃんの姿はなかった。タツコ先生は、このことをオンバアに話すと言った。

先生には、オンバアにも話していない本当のことを打ち明けたのに、信じてもらえない辛さにトッコが泣き出してしまふと、タツコ先生はうそ泣きはいけないと言って怒り出した。

興奮した先生の鼻息の音がすうすうと荒い。

オンバアは挨拶を交わす時、電話の向うの先生に丁寧な頭を下げた。

まずタツコ先生の言い分をふんふんと聞いて、

「そのきれいなハンカチを、盗られて困っている人があるですか」と尋ねる。

「いいえ」

「それなら、子供が帰ったら、よく事情を聞いてみますから」

「お家でしっかり指導をお願いします。今のうちならまだ、小さいですから修正が利きますから。十分に愛情を注いでやってください。園にいる間は、私もトッコちゃんを気に掛けています」

他の園児を送迎する母親たちを目の当たりにするのは、トッコにとって辛い試練だと先生は力説した。母親の愛情が得られないから、作り話をして誰かに愛されている自分を創ろうとしている、と。

「先生」

「は？」

「ハンカチを盗られた人があるかと聞いたら、いいえ、と言わしやったじゃないですか」

「ですから、今の所は、ということですよ。血の繋がりが無い子の面倒を見るのは、難しく大変でしょうけど、愛情を注いでやってください」

「先生」

「はい？」

「山の上の庵まで、遊びに来てください。そりゃあ眺めがいいですよ。山の水を一杯、汲んで差し上げましょう」

オンバアは再び、電話の向うの先生に、丁寧に頭を下げてから受話器を置いた。

幼稚園では以後、ハンカチの見せびらかし合いが禁止された。

トッコは今一度、児童公園を中心にしたその近辺を、ハンカチのおばちゃんを探して歩いた。

無作為にあちこち歩くが何処にも見つからず、手掛かりも無く、空しかった。探す気力も萎えて、昨日、おばちゃんと楽しく過ごした公園のベンチに座ってみる。くさいほど強く匂っていた香りさえ、今は、溶けるように失われていた。

それからのトッコは、お経の練習も上の空になりがちだった。普段なんでもない文言をつっかえるわ、

読み飛ばすわ、つまらないへまをずいぶんやった。

その人に再び会えたのは、それから約一ヶ月半後のこと。幼稚園の先生もハンカチの出所の詮索を諦め、半分忘れかけていた頃のことである。

ハンカチのおばちゃんは、前に会っていた児童公園ではなく、山の登り口の田んぼの畦にある、大きな桑の木の下にしゃがんで待っていた。クリーム色の日傘をさして深く被っていたが、トッコが通りかかると、いないないばあを楽しむように、傘をばつと外し、おどけて見せた。

五月のうちから日傘をさす人も少ないので、トッコの注意は最初からそちらに向いており、傘をふり下げた途端、満面の笑みが浮かんだ。

トッコはもう一度会いたいと捜し歩いたことや、貰ったハンカチのことで疑われたことを訴えた。気が持たが溢れ、涙も涙も溢れた。

「先生に言つて。おばちゃんがハンカチくれたつて、話して」

ハンカチのおばちゃんは鞆から薄くてつるつる滑る紙を出して、トッコの涙を拭き、涙もかんでやつ

た。ついでに、一つずつずれていたカーディガンのボタンの掛け違いを、留め直してくれた。混ざり毛糸のカーディガンの上を滑る赤い爪の指先。トッコはあごを引いてずっと目で追った。

「本当。へんな先生だね。トッコちゃんがそんな泥棒なんかする訳ないじゃない、ねえ。そんなけちの付いたハンカチ、先生にやっちゃいな。また新しいのを持って来たから。泣かないの。ほら、見て。舶来ものだよ」白い上品な織りレースをふんだんに使ったものと、「青いのもあるよ。どっちがいい？両方？」もう一枚のハンカチは、刺繍で四角(よすみ)に豪華な花束を配してあった。トッコはハンカチをチラッと見たが、それよりも、おばちゃんの腕を掴んで揺すぶった。

「ずっと探したんだよう。何処に居た？」
責めるように真直ぐ見る。

ハンカチのおばちゃんは、うーんと言いながら唇をすぼめた。

「忙しかったから」と、答えると、
「なんで」とトッコが矢継ぎ早に訊く。

「お仕事」

「お仕事って何」

「おおね、と彼女はまた首を傾げる。

「まあ、何て言ったらいいかな、子供に。色々…。
着物を着て踊ったり、三味線を弾いたり、…そのほか色々よ」

「踊り？　どんなの、やって？」

「ちよつと、ここじやあねえ」そう言つて、チューリップのようなスカートを撫で下ろし、リボン飾りの付いたハイヒールつま先を上げた。困つたようなその様子を見て、トッコは「無理ならいい」と伝えようとすると、思いがけなくハンカチのおばちゃんから、

「踊り、見に来る？　家に」と誘われた。

一も二もなく頷いていた。頷いた後から、躊躇したくらいだ。

幼稚園の黄色い鞆を肩から斜めに提げて、おばちゃんと並んで歩くと、自然に手を繋いだ。

幼稚園にはいつもひとり通っていたから、ちよつと照れくさい。でも、やっぱり顔は笑つてしまう。

寄り道して遅くなるとオンバアが心配する。暗くなったら、オジイが怒る。気持ちのせめぎ合う。今は、手を繋いで歩きたい気持ちが勝る。

今来た県道をだいぶ戻り酒屋の通りを左、路地へ入って更に行く、古い建物の豆腐屋がある。人がや々と通れる建物の脇を裏手に回り、自転車を避けて進むと階段があった。

その二階がハンカチのおばちゃんの家。戸を開けると、部屋の匂いか香水なのか、きつい臭気が立ち込めていたが、トッコはここで鼻をつまんだら悪いかな、と思つて我慢した。入り口横にでっかい造花飾りがあつて、ぷっくりした頬つぺたを軽く擦つた。家具を置いていない六畳の部屋で正座して、おばちゃんの支度を待った。出してくれた外国産のチョコレートを一ついただく。ほろ苦くて癖のある甘さが口いっぱいに広がる。口角から涎がはみ出したので、上つ張りの袖で拭つた。

ハンカチのおばちゃんは、程なくして一重の縦縞の着物姿で奥の部屋から現われた。襟足を大きく扱

いた着付け方に、トッコは目を見張る。オンバアも仕事着は着物だが、襟はぴっちり合わせて、崩したりしない。それがトッコの標準だったから。

「お待たせ」と言いながら、彼女はおもむろに、カセットデッキのスイッチを入れる。三味線の音と共に都々逸が流れ出すと、小走りに部屋の中央へ移動して立ち位置を決める。扇子を小道具に使い、足裁きも軽やかに、ハンカチのおばちゃんは踊り出した。

着物を着ると、途端にその人の仕草が変わつた。ひとつひとつの動作が型に決まつて、なんて姿がいんだらうと感じた。

トッコはとても新鮮な気持ちで踊りを見ていた。終ると、一生懸命で拍手をした。おばちゃんも、嬉しそうに微笑んだ。

「格好いい、すてき」

「本当？　ありがとう」

チョコレートをもう一つよばれたあとで、おばちゃんは膝に乗せて抱っこしてくれた。

トッコの頭を引き寄せて、ちやうど気持ちのよい力加減で、きゅつと抱く。

トッコは友達からよく線香臭いと言われるのに、おばちゃんは「白檀の香りがする」と、素晴らしい言い方をしてくれた。やわらかい感触、人肌の温かさ。ずつとこうして欲しい。初めて訪ねた他所の家のな、こんなに落ち着けるのはどうしてだろう。トッコは自然と、おばちゃんに体を預けた。

「おばちゃんは どうして、あたしと仲良くするの」
「トッコちゃんが可愛いからよ」

「お迎えのお母ちゃんがいなくて可哀想だから？」
トッコが上目遣いに見たその人の表情は、困り顔だった。

その時、部屋を仕切る奥の襖が不意に、ひとりでに開いたと思った。

頭を坊主に剃った男が煙草を吸いながら少し開けた襖からぬつと乗り出して、トッコをねめつけるように見た。

「終わったのか」静かで、低く濁った声音だった。
トッコはびくつとなつて、そのまま凍りついた。

半袖の肌着から見える手首までの刺青。
「全く。ガキ連れ込んで、いつまでママゴトやって

んじゃねえ。とつとと支度しろ」

恐怖感が講じ、誘拐という言葉が思い浮かんで怯えた。小さい男の子が誘拐され殺された、恐ろしい事件のことを園の友達に聞いたばかりだった。こんな所まで付いて来てしまつて。知らない人の家、上がりこんでしまつて。不安と焦りで掌に汗をかく。
「あら、いいじゃない。もう荷造りは済んでるわ。飛行機は明日だし、何をそんなに急ぐこともないでしょう。ねえ」

ねえ、と水を向けられたところで、それどころではない。楽しいおしゃべりも格好いい踊りも、既にもかもがトッコの頭の中からすつ飛んでいた。

窓の外では、夕焼けの色が赤から紫に移りかけている。帰る時間が遅くなった。オンバアが心配する。暗くなつたら、オジイが怒る。

「お家に帰る」意を決して、そのひとことを言った。
「ゆつくりしていけばいいのに。もう今日しかないんだから、晩御飯、一緒に食べようと思ったのよ。変なおじちゃんの言うことなんか、気にしないで」
「なんだと、あー？」

おばちゃんの言葉に反応して、男は野太い声を出した。その後で何が面白いのか、くつくつ笑うが、トッコには冗談にも受け取れなかった。

「もう、暗くなるし……。お家遠いから」

「あら、そう。残念。じゃ、送っていいこうか」

「甘やかすんじゃないぞ、すぐつけあがるからな」

「一人で帰れます。さようなら」

狭い玄関で、ズツクを突っ掛け爪先をトントンする。その間にも、ふたりの会話を背中で聞いた。

「ねえあんた。一緒に、連れて行っちゃだめ？」

「バカヤロ、何言ってるやがる。言葉もわかんねえ所に、ガキなんか邪魔なだけだ」

「あらア、良い値がつくかもよ」

階段を降り、自転車を避けそこなつて腰を打ったが、後になるまで痛みも感じなかった。ハンカチのおばちゃんが、窓を開けて何か言ったみたいだったが、よく分からない。

トッコはもう、夢中で走り出していた。オンバアの手作りの手拭きをポケットの中でぎゅっと握り、息が切れ苦しくて走れなくなるまで、駆け続けた。

はあはあ肩で息をして、街灯も疎らの暗い坂道を登る。

坂の途中まで来ると、トッコの名を大声で呼びながら下ってくる、オジイの声が耳に届いた。遅い帰り心配して、探しに来たのだ。トッコは泣きそうになって、歯を食いしばった。その時初めて、何だか歩きにくいと思つて、気が付いた。慌てて履いた靴は、右と左が反対だった。

今日は、お尻を叩かれても仕方がないんだ。早く、オンバアとオジイのいるお家へ帰ろう。トッコは一所懸命、呼ぶ声に叫び返した。

行李の中に黄ばんだハンカチを戻しながら、ある考えに囚われることがある。

ハンカチをくれた女の人は、少し自分と似ていた気がする。

踊りを見せてくれた日以来、二度と会う事はなかったが、時を経たからとて、忘れ去ることもまたなかった。きれいなハンカチを携えて現われ、掛け違えたカーデイガンのボタンを、優しく留め直してく

れた。

オンバアは、トッコがボタンの掛け違いをした時、拙い指づかいでも、自分でやり直すのをじっと待っていた。それもまた優しさなのだと、今は感じられる。だから、おばちゃんのこととは、これからも大切に胸の内だけにしまっておこうと思っている。

三、磯横の人々

風のある日は、いつもより潮の匂いが濃いと感じる。煽られて逆立った髪を撫で付ければ、潮と湿気とで、去年から伸ばし始めた髪が重くべたつく。

トッコは学校の鞆を通り道にある鉄道の手荷物一時預かり所に預け、催事道具一揃い包んだ風呂敷だけひつ掴んで、坂道を駆け降りた。道の両側には軒先から麦わら帽子を吊るした店、膨らました浮き輪や、かき氷の赤と青の目に鮮やかな旗など、海水浴客相手の商売屋が軒を連ねて、海岸までの砂利道を賑やかに彩っている。

市営駐車場の金網越しにトッコが軽く片手を上げると、同級生のコーちゃんは腰掛けていた防波堤からバツタみたいにぴよんと飛び降りた。いくら暑くても、『ランニングシャツ一枚での登下校は体裁が悪いからイケマセン』と、朝礼で注意されたばかりなのに、コーちゃんは相変わらず、校長先生に注意されたイケマセン見本通りのスタイルだ。

くたびれて伸びきったランニングシャツは、たつぷりと袖ぐりが開き脇が丸見えである。ズボンの裾は膝まで折り上げたバミューダパンツ仕様、素足に運動靴、おでこに掛けた（本来は肩から斜めに掛けるべき）ズック鞆は、手垢と汗染みと落書きだらけ。学校で指定されている無地の黒いベルトは一年生のうちにきつくて止められなくなり、貰い物でこれしかないと言うベルトは、二段のハト目とごつい鋸打ち、バックルに悪趣味な飾り付きを使っている。

「コーちゃん、遅くなってゴメンね。係り会がちつとも終わんなかったの。この度はおばあさんの三七日（みなのか。没後二十一日）に拝み屋お呼び掛りま

して、参りました」息を弾ませて言うと、

「オンバア、来ないのか。いよいよ死んだか」と、返してきた。

「なんの。地獄の閻魔様が追い返して寄越したよ」

「またもやか！ 拝み屋のオンバアは倒れても不思議と蘇るな」

「まあね」

トッコがオンバアから免許皆伝のお墨付きを貰ってから、およそ一年が経った。

トッコも一人で勤めに行きはじめた頃は、挨拶の口上すら、しどろもどろで緊張を強いられたが、現在は人の多少にかかわらず読経に集中出来るまでになつていた。

オンバアは昨年、猛暑の夏から秋への変わり目頃に倒れ、病院に運ばれてから以後は、あまりよろしくない。

リウマチ以外には、何と言って病名が付いている訳ではないのだが、血が薄いか血圧が高いとか、なんとなく弱っている感じだった。

臥せることもままある。それでも、ある程度休む

とオンバアはそこそこに持ち直して、もう三遍も現役復帰を果たしている。

「ワザとあの世とこの世を行き来してるんじゃないやえか？」

そんな風にコーちゃんがずけずけ言うのは、初めて倒れてそれきりだった自分のおばあさんと照らし合わせて、訝(いぶか)しく思うからだろう。

現役の海女だったヨシばあさんは、言葉も態度も男勝り、普段病氣らしい病氣をしたことがなかった。亡くなった日も朝から沖で潜って、貝採り漁をこなしていたという。ヨシさんとオンバアは何故か気が合つて仲が良かったから、二人を余計に比べてしまふ。歳は九つもオンバアが上。逝く順番が逆じゃないかと、トッコ自身だつてそう思う。

「生きてるんなら、オンバア連れて来い。オメエのお経は素人つぼくてありがたみが薄い」

「残念でした。お師匠さんはまだ万全じゃないんだよ」

「へっ。チクシヨウ。しようがねえ、手え抜かねえでたつぷりやれよな」

「安心しな。こちとら免許皆伝よ」

悪態をついたあと、コーちゃん鼻を擦って急に神妙な顔つきになる。ズボンの縫い目に手のひらを付け、きっちりキヲツケをすると、幼馴染みのトッコに畏(かしこ)まつて頭を下げた。

「宜しくお頼み申します」

釣られるように、トッコも真面目くさつて請け負った。

「謹んで、お勤めさしていただきます」

「安くして?」

「ばか言つてんじゃないよ」

磯横の長屋に行く時は、防波堤伝いに波消しブロックを跳んで、栈橋を横切る順番が近道だ。コーちゃん運動靴の残像を追うように、トッコはごろごろ岩石だらけの浜を小走りに行く。足場の岩ははつきりしたものに乘らないとグラグラするし、波を被った所は海草でぬめつて滑り落ちるから大変危ない。特に、打ち上げられた真っ黒なタールにトッコは特別注意を払う。うっかり制服に付けでもしたら大変、

ネバネバベトベト、どんな洗剤で洗つても落ちないのだ。

ルートの取り方はジグザクで複雑。飛び移る石の大きさも高さも間隔もまちまちで直線的に進めない上、干満(かんまん)の差があれば使う石はその都度異なる。だからお転婆なトッコでさえ、地元の子の案内なしで海岸の近道するのは難しい。

コーちゃんの住む長屋は、砂と石が混ざつた磯浜の堤防下にあつた。波打ち際から玄関まで、浜辺の幅は平均十五メートルほど。傾斜面なので満潮時でも波は届かないが、海風は絶えず家屋に潮を被せる。強風に遮るものがない場所で、屋根のトタンを飛ばされぬように、丸い石を沢山のせてあつた。夕日に照らされて一層赤錆が目立つ灰色のトタン屋根の、石の下に長く影を曳く。

軒下には浜昼顔の群生、長屋に居ついた二匹の猫の昼寝にちょうど良い場所だ。潮の香に負けぬ鼻を衝く匂いは、長屋から少し離れた露天掘りのゴミ焼却場から漂つてくる。風向きに因つて、今日は特に鼻が曲がりそうなくらい変な匂いだ。トッコは嗅覚

が慣れてバカになるまで、時々息を止めて辛抱した。

二人が到着する頃、家の外では既に松明を据える竹組み作りも終わりに近づいていた。型の決まった細工物は熟知した人がやるから、暇になった若い人達は各々タバコをやったり、お先に一杯ひっかけたりしていた。

コーちゃんのお母さんは数人のおばさん達と、縁台を出してお供えの団子を丸めているところだ。赤や白の団子を長い竹ひごに通し、太い藁束に沢山挿したものを祭壇の左右に一対作る。

「お婆さん、今晚は。本日はお婆あさんの三七日にお呼び掛りまして、参じました。謹んで、お勤めさせていただきます」

「今晚は、トッコちゃん。宜しくお頼み申します。拝み屋のオンバアサマには、うちの婆あちゃんが、生前とても懇意にして貰って。一言お礼も言いたいだけ、調子が悪いだって？　どんなですか」

「はい。今は大分良くて、保健婦さんが手伝つてくれれば、ちよつと身体を起こしたり出来ます。一時、

昏睡になつてびっくりしたけど」

「まあ、そうなの。トッコちゃん、大事にしてやってね」そう言いながら、風に煽られた水色のナイロンスカーフを結び直した。

一緒に作業しているお婆さんたちは、口々に領ぎ、大変だ、そりやあ大変だ、大事にね、と繰り返言つた。それに対し、トッコは「いえ」と、首を竦めて口ごもつた。亡くなったヨシさんの親族を前にして、自分のところの年寄りだけが、回復しつつあるというのも言いにくいものだ。

「病人を家にひとりで置かれないでしょ。トッコちゃんは学校があるし、誰か、看る人居るの？」

「オジイが」

「おじいさん？　ああ、オンバアサマの弟さんね。

お寺の掃除の仕事をしているんじゃないか？」

「和尚さんに頼んで、しばらく暇を貰いました」

「そう。それじゃあ、家計はあんたが頑張るしかないんだ。若いのに、偉いね。うちのコージなんか、遊び歩いてばかり。同じ歳なのに幼稚いんだから。ほんとにトッコちゃんの爪の垢でも煎じてくれない

よ。あ、ねえ。お経が済んだら、忘れずに団子を持って行ってね」

「ありがとうございます」

「何にも。ばあちゃんの供養なもの」

団子作り方のひとりで、痩せたおばさんが「まったく、ヨシさんはいい死に方をしたよ」と切り出した。ヨシばあさんのように家族に手を掛けさせず、コロリと逝きたいと彼女は言った。すると、年の若い頬が赤らんだ女の人が、そのおばさんを遮って「嫌だわ、何言うの。看病させてくれなきゃ、残された家族は諦めがつかないじゃない」と、餅取り粉の付いた白い手を。パタ。パタ叩いた。

取りとめもなく切りもない、こういう話は。

女たちは口々にボケたくない、寝込みたくない、苦しみたくなかないと言いながら、せつせと団子を丸めている。海風が吹き付けて、お経を書いた五色ののぼり旗が旗竿に纏い付く。白い団子に舞い上がった細かい砂粒が付着しても、誰も何の気にも止めない。「あ、すみません。着替えるのに部屋を借ります」
「どうぞ。チヨが散らかしてるけど、ごめんね。片

付けな、って言っても、ちっともしなくて。蹴飛ばしといて」

「トッコはおばさんに一礼した。」

コーちゃんの家の玄関の日除けの筵(むしろ)をはぐったところで、トッコは苦笑いする。なるほど。おばさんが蹴飛ばしといて、と言ったのはこれかと合点した。

あまり可愛くないB級ファッション人形をはじめ、おはじき、貝殻、お菓子のおまけ等々それはもう盛りだくさん。宝物は部屋いっぱい、敷き詰めるように並べられていた。この春から小学校へ上がったチヨちゃんの活発な足が、一体何処に立っていたのか、見当がつかないほど。

トッコはうーんとつぶやきながら、比較のおもちやが少ない部分を見つけて、肘から下を使って押しやり、部屋の入り口で風呂敷を解く。すると、板戸を鳴らし、チヨちゃんが入ってきて、土間からにじり上がって片膝を乗せた。

「トッコちゃん、いつ来たの」

「今」

「遊んだ？」チヨちゃんは、片端に寄せられたおもちゃにじっと見入っている。

トッコは狭いところで立ったまま足袋を穿くので、ちよつとよろよろした。「あ、ごめんね。少し動かしたよ。着替えたら、直すね」

「いい。トツちゃんなら貸し上げた。他の子には貸さないんだよ。トツちゃんだけでだよ」

「ありがとう。恩に着るわ」

着物の裾を決める間も、帯を巻く時もチヨちゃんは大事にしている少女漫画を見せてくれたり、ピンクのビーズの首飾りを首に掛けてくれたりして、とても歓迎してくれる。

「遊びに来たんじゃないよ。おばあちゃんの三七日に呼ばれて来たの」と言っても、

「ずるい」と連発するばかり。

よくよく聞いてみると、さつきコーちゃんがシツタカ貝をポケットから出したことや、トッコが窓から手を出して砂を払ったのを見て、自分を仲間外れにして磯遊びをしたと思ひ込んでいたのだった。

シツタカ貝は、コーちゃんが磯を歩くのが遅いト

ッコを待つ暇に、ちよちよいと拾うように採っただけなので、「そんなの、遊んだ内に入らないでしょう」と諭しても膨れっ面。

「砂だつて滑つて手を付いただけだよ」と説明しても上の空。

すっかり支度が出来て衣装の襟を整えても、チヨちゃんのもつちりとして少し粘つく指はトッコの着物に離さなかった。トッコが箆を持ち上げて外を覗くと、公民館から借りてきた座布団をいっぱい抱えたコーちゃんが見えた。

「支度、出来たよ」

「おう」

チヨちゃんに繋がれた手を差し上げ、「少し遊んでからにする？」とトッコは困った眉毛になった。

「しょうがねえなあ。こおらチヨ。チーヨってば。」

ねえちゃんの手離せ、ナムナムが済んだら後でお団子焼いてやるから」と、妹をたしなめた。

「あれえ…、泣き屋さんは？」

「来ねえよ。父ちゃんが、三七日は良いだろうって、呼ばなかった」

「じゃ、今日は私だけ？」

ひたすら悲しげに泣いて座の霽囲気作りをする泣き屋がいらないとなれば、拝み屋としてはお経の長いのを二つ三つやらないと格好が付かない。今日はオッサンも来ないし、ひとり目は目立つなあと、胸にいささかの不安。が、泣き言練っては居られまい。拝み屋のトッコ、お師匠さんにお墨付きを戴いた、その誇りにけちが付いちやあならない。

「ふん」と自分を奮い立たせると、爪先に力を入れて華草履を履き、チヨもそのあとへ続いて表へ回った。

「ほら、チヨは座布団運びやって。トラックが上の道に来てるから、降ろして、あそこ。莫塵(ごんじん)を出してるところに持って行くんだぞ。さあ、行った行った」

コーちゃんは抱えた座布団で妹の背を押して促す。

公民館で借りた金茶色の座布団には、どれにも大なり小なりシミがついている。手伝いのおばさんたちは、どうしたらそれが一番目立たないように置け

るか、子供たちが運んだ座布団の裏表や向きを、天地返しひっくり返していたけれど、ドヤドヤと人々が座つてしまえばどの汚れも大差なく、尻の下に隠れて見えなくなった。

チヨちゃんは構ってもらえないのが面白くなくて、手伝いに加わらず、長屋の外れまで行つてしばらく拗ねていた。が、皆忙しくて誰も連れ戻しに来ないから、拗ねるのにも飽きて自ら戻った。近くの大人に座るように言われて前列に入り、素足を投げ出してコーちゃんの背に凭れた。

横に体格のいい妹である。甘えて体ごとぶつかれば、いくら体の大きなコーちゃんでも結構揺れるし痛そうに顔を顰める。けれど、彼はチヨちゃんに寛容だった。学校では、余計なことや威勢のいいことを言つて、度々先生に呼び出されている癖に。そんな、妹思いの兄貴ぶりが、兄弟の無いトッコの胸をすっぱいように締め付けた。

陽が落ちて、辺りは暗くなりかけている。トッコが風除け付きのお灯明を点すと、祭壇はぼうつと明

るくなつた。オンバアはマッチ一本で六本の蠟燭（ろうそく）に点火していたが、トッコはマッチが怖くて擦れない。代わりにライターを持ち歩く、裏事情はコーちゃんに内緒だ。

未練がましく、泣き屋が居ればそこに座す決まりの席をちらりと向くと、偶然コーちゃんの親父さんと目が合う。彼は、始まりのきつかけを求められたのだと確信しておもむろに頷き、厳（おごそ）かに「始めてください」と言った。トッコは虚を衝かれて目を瞬く。

『ふん。ま、…。頑張るべー』大きく息を吸って気を取り直すと、祭壇正面の座布団へにじり上がって居住まいを正し、ヨシさんの御霊に深々とお辞儀をした。

蠟燭の灯りがチラチラ風に揺らぎながら、すまし顔の遺影を照らした。トッコは、お師匠さんが寝込んでしまわなければ、生前親しんだ人の供養に自分で来たかつたろうに、と思いを巡らした。

磯横の長屋の人々が作る塩は、天然の海水から時間と手間をたっぷりかけて作るから貴い。しつとり

して、きめが揃い美しく、その味わいにかすかな甘みと苦味がある。トッコが小さい時から何度も訪ねて来たこの場所。

あの頃は何処へでも歩いて行ったから、山の庵から塩を買いに下ってくるオンバアを、ヨシばあさんは「遠い所からわざわざ」と、とても歓迎してくれて、いつしか家上がりこんでお茶を飲んでお喋りするまでの仲になった。

幾年か前、酒屋が町に一軒しかなかった頃、酒屋を含む商店街が大火で数多の犠牲者を出したことがある。その数年前から自家製酒の摘発も厳しくなつて、どこの家でもどぶろく作りを止め、弔いにする清めの酒が手に入らず困ったことがあった。

そんな時、磯横の人達だけはどう言う訳だか、役所のお目こぼしで昔ながらのどぶろくを作り続けていたというのだ。オンバアは、それを拝み屋仲間に融通してもらつて、火事で亡くなった人達の供養に使うことが出来た。

オンバアがヨシばあさんの話題になる時、大概、どぶろくを貰った時の逸話が繰り返される。オンバ

アが「とても助かったよ、有難うね」と、酒代を払おうとすると、ヨシさんは浅黒い顔に悲しみを浮かべ、困った時はお互い様、そう言つて何も取らなかつた。ただ、火災の犠牲になつた人のことや、家を焼かれてしまった人のことを、とても気の毒がつていた。情けのある人だと。

『この次の、五七日(いつなのか。没後二十五日)にオンバアが来るのはちよつと無理かな。でも七七日(ななのか。没後四十九日)には多分治る。それがダメでも新盆までにはきつと。悪いけど、それまで弟子で我慢してね』

トツコは団扇太鼓をささげ持ち、いつそう打ち鳴らし故人の昇天を祈つた。

祭壇に向かつて故人の縁(ゆかり)の人々と共に題目を唱和している最中、ふと、斜め後ろに何者かが座っている気配を感じた。そこはコーちゃんちのおじさんが座っている手前で、トツコがお灯明(とうみょう)を点けた時には空っぽだった、呼ばれなかつた泣き屋の席だ。そうでなければ最前列は血の濃い親族が座る。

一番濃いのは息子であるコーちゃんちのおじさん。しかも彼は、揃うべき親族が全員座つたのを確かめた上で、トツコに始めてくれと言つた…。目の端にちらりと何か映つたような気がして、気になる気になる。気配は男の人じゃない。そんなに強くはない。お経を上げながら、ひとしきり考えた。

『誰?』

お経のひと区切りで御霊(みたま)に深くお辞儀する時、トツコは衣の脇を透かして気になる場所を盗み見た。すると、線香の煙のような白くふわふわしたものが、あろう事か、塊になつて人の姿を模(かたど)つていてではないか。送られるべき故人が、一心に手を合せている。ぎよつとして思わずお経本の頁を繰り間違え、冷や汗をかく。

『ヨシばあば? 何で?一緒に拝んでるの』

トツコは、ちようど団扇太鼓から木魚の撥(ばち)に持ち替えるどさくさに紛れ、お経を二、三行ムニヤムニヤと誤魔化した。

白い影を振り払うように続きの般若心経を唱え、木魚の座布団が沈むほど、力任せにぶつ叩いた。

そしてほどなくお勤めが済んで、おずおずと振り向くと、いつの間にか。あれほどはつきり見えていたヨシさんの靄(もや)は、跡形もなくなっていた。

座を降りてお茶を貰い、安堵したトッコが無防備な溜息をつくとき、そこで目が合ったコーちゃんに陽に焼けた顔を憎らしげに嚙めて口をパク。音が付いて「フン」、とあごをしやくつたが、その動

作はだいぶ、ぎこちなかった。
波の音がひっきりなしにする。
小石を洗う音がする。

四、拌み屋のオンバア

「おう、トッコお帰り」

懐中電灯に照らされ、驚いたカマドウマが薄暗い足下を跳ねまわっている。引き戸を開けると、土間の竈(かまど)で湯を沸かしていたオジイが振り向いた。

「ただいま。磯横のお勤め、終わりました」
「ご苦労さん。大勢だったかね?」

「はい、長屋の人は、みんな。コーちゃんのおぼさんがお師匠さんのこと、お大事につて。ほら、こんなにお団子持たせてくれたの」手提げ袋を広げ、オジイに見せる。

トッコは流しへ行き、タンクを覆った木製の蓋をずらして中の水を柄杓(ひしゃく)で汲むと、ちよろちよろこぼしながらコップも使わずに口で啜った。

肩まで伸びた髪を耳に掛けて押さえ、飲み終えると口許を袖で拭く。山腹からの湧き水を台所に導いたタンクの水は、ひんやり冷たく咽を潤してくれた。

もしオンバアが見ているところで、こんな行儀の悪い水の飲み方をすれば、厳しいオンバアのカミナリが落ちるところである。オジイはトッコに甘いから、余程のことがなければ好きにさせておくと知っている。

流しからトッコが退くと、オジイは洗面器に注いだ鍋の熱い湯をタンクの水でうめて、途中でチョツと指を入れて湯加減をみていた。

「オンバアの身体を拭くの？ 私やります」 トッコはオジイから湯の入った洗面器を受け取る。

「お師匠さん」と声を掛けて肌掛け布団に触れると、オンバアは薄目を開いた。

「帰ったか」

「はい」

トッコは改まつて膝を揃え傍らに座り、懐から熨斗(のし)袋を出して本日の収入をオンバアに見せた。寝込んでまだ頭はしつかりしているし、口も達者。熨斗袋はいつものように仏壇の懷棚に入れて、手を合わせる。

「どうだった、おヨシさんの所は」

「今日は泣き屋さんがいなくて、ひとりりで緊張したけど頑張りました。さあ、身体を拭いてさっぱりしましょう」

腕、背中、胸部と、少しずつオンバアの寝巻きの浴衣をはだけながら、トッコは手際よく拭き上げていった。背中では気持ちが良いくらいに擦り、臀部の床擦れがかさぶたになったところは、痛くないよう

に注意して。

オンバアは、目を閉じ力を抜いて身を任せている。

「そうか、安心だな。わしの代は終わった」

「だめです、弱気なこと言つては。お師匠さんのお経でなきや。私は代理。間に合わせだもの」

そう言うと、ふいにコーちゃんの、憎々しげな

『へ・た・く・そ』が、脳裏に蘇った。

床擦れに軟膏を塗ると、柔らかいガーゼで覆い、腰巻を直す。コーちゃんのアツカンベエの幻を振り払うように、ぴんぴんと裾を引っ張り整える。

それから、「あの…。あのね、お師匠さん」と言

いかけて、そのあとためらつて言葉が切れた。オンバアは、目をぼつちり開いてトッコを見た。

「なんだね」

「あの……」

お経をあげてる時ですけど。煙の塊みたいなのが、みんなと一緒に座つて拝んでました。私、どうしてもヨシばあさんに思えて」

「こりやあ……いや」

「すぐドキドキして。でも、お経が済んで二度目に見た時は、もう居ませんでした」

オンバアが顔を歪めたので、トッコはずぐ腰紐に手をやって、

「きついですか？」と、気遣う。

「いや」とオンバアは否定し、少し黙した後、しわがれた声で「そうか」と、ひとりごちた。

「一昨年(おつとし)逝った旦那の年忌をやると思つたかなあ。みんな居るから身内の席に座つたか。そんなところかね」と言う。

「おじいさんの三回忌？ 確か、寒い時でしたね」

「ヨシさんは、自分が死んだと知らなからう。無理もない。まだ三七日しか経たないだから」

トッコが手拭いを絞る手は、さつきから止まつたままだ。

「心を込めて、押んだか」

「はい：あ、でも終いの方で、ヨシばあさんを見て…少し取り乱しました」

「そうか。次はもつとよく押んでやりな。四十九日までに段々道が開けるだから」

お師匠さんの代理。自らそう名乗るため、この一年間、けして無為に過して来たのではない。オン

バアの教えを守りその真意を学び、自分なりに日々の精進を重ねてきたつもりだ。

初めの頃は供養に行った先々で、子供を寄越した、舐めているのかと辛いことを言われもしたが、精一杯お勤めをして終えると逆に、いい声と言われたり、しつかりしていると褒められたり、中には熨斗袋の中身はずんでくれる家もあった。

それが自信になつてトッコを支えた。自分ひとりでも押み屋をやれると、思い始めていた。

一通りお経を唱えても、肝心の御霊、ヨシさんには届いていないようで気掛かりだった。何が足りないのか。自分にはその足りないものが分からない。そのうち所詮は未熟な代役に過ぎないのだ、という思いに囚われる。

「おヨシさんを、極楽へ送つてやらねばな」

「はい」

天井を見上げるオンバアの口許は、入れ歯を外したせいか、少し緩んで歪んでいる。

「おヨシさんは。あんな人は、なかなか無いよ。い

い人は早く逝く。もつたいないな」

「ほんとに」

オンバアは、フーンと鼻から声を出した。

「行ってやりたいなあ」

「そうですね。早く元気になってください、お師匠さんが送ってあげないと」トッコが畳に手を付いて立とうとした時、

オンバアは「おヨシさんも…。立ち退きなんぞなれば…」と、言いかけて咳き込んだ。

「え、立ち退き？」

咳の辛そうなオンバアをさすっていると、オジイが入ってきた。オジイと二人で、仰向けに寝ていたオンバアを横向きに変えた。

「ヨシばあさんの家、立ち退きって何ですか？」

「お前は知らんのか」

トッコは立ち膝のまま、オジイを見た。オジイはオンバアの背中をさすり痰をちり紙に取る。

「磯をずうーっと埋め立てて、二十メートルの広い道を通す工事が始まる。新聞に出とった。磯横長屋は終いじゃ」

市内外を繋ぐ唯一の国道。磯横を含む海岸区域の三キロメートル程、山から急に海に落ち込む険しい地形で、危険な崖下を通る箇所があった。崖の落石防止工事は古い上に不十分なため、近年度々落石をみる。また、大雨が降れば土砂崩れを起こし、車が巻き込まれた事例も複数。道幅に余裕はなく、歩行者も利用しているのに歩道は作れない。それでもなお、通学路である。

磯横の子供達が決められた通学路に危険を感じ、海縁の近道を利用して、皮肉なことにそれが黙認されている。

学校の指導で波にさらわれる危険性の高い磯浜は、子供だけで遊ぶのを禁止していた。まして落ちたら自力で這い上がれないテトラポットの上を跳び歩くなどもつてのほか。

しかし、子供たちは歩道も信号もない国道の方が危ないと口を揃えた。四六時中、車がかつ飛ばしていてすぐ脇を走り抜け、排気ガス臭いし、ちゃんと端を歩いていてもクラクションをパーパー鳴らされ

てヤカマシイつたらないのだ。

国道を利用する者は、落石の片側通行による渋滞と慢性的騒音、多発する事故にウンザリしながら、じつと耐えていた。道路拡張工事は海岸地域に暮らす者にとつて、長年の懸案事項であつた。

トッコは力なく声を出しながら息を継ぐオンバアを覗き込み、手拭いを折つて尖らせて、目頭の涙を拭つてあげた。

「いつですか？」

「もう間もなく」

「まさか、今日だつて磯横の人達は、何も言つてなかつたのに」トッコの胸中は粟立つ。

「ああ、あの長屋までも埋めるのは、もう少し先の話さ。海岸に沿つて海にテトラを沈めて、それを基礎に防波堤を作つて、ぐるっと囲つたら水を抜いて……何年掛かりかな、容易じゃなからう」

桶の湯で手拭いをゆすぎ、力を入れて絞る。雫が、畳に散つた。

「でも、工事が進めば……」トッコは口籠つた。

「長屋の衆の移転先はお役所で見つけるし、そこへ

ゆつくり越せばいいんだよ」

「だつて」埋め立てたら何もかも無くなる。

磯横の長屋には、コーちゃんやチヨちゃんの他にも知つている人が大勢住んでいる。お墓もあるのに、今日もいつもと変わらないでいたコーちゃんは、埋め立ての事を知らないのだろうか、関心がないのだろうか、そんな事トッコに言つてもしようもないと思つて何も言わないのだろうか。彼が得意な磯釣りも素潜りも、出来なくなるのに。チヨちゃんはイソギンチャクに指を突つ込んで遊べなくなるから、泣いちやうかも知れない。

だがトッコ一人がやきもきしたところで、新聞で発表された計画は、子供が口出し出来る類のものではない。まさしく、そんな事トッコに言つてもしようもない、そう言うことだ。解つていた。

やがて、背を向けたままのオンバアがぼつりと言つた。

「皆でんでんばらばらに」

「姉え、それは、仕方なからうよ」

「ひでえ話だ」

「長屋そっくり移れるような、そんな広い土地なんて無いだから。だがな。中には狡い駆け引きをして、得をした者もいると聞く」

「え……？」

トッコは眉をひそめた。オジイは答えず、洗濯物を抽斗に入れると、オンバアの汚れ物をガサガサまとめ、トッコが畳に飛び散らせた水も、汚れ物に擦り付けた。

「海は元々、人が住む所と違う。なあ、トッコ。嵐が来たら、浜はどうなる？ 高波で堤防の上まで波を被るだろう。そんなところに人が安心して住めるか？ そんな土地を先祖代々守れるか？」

「う、うん……」

項垂れたトッコに、オジイはそうだろう、尤もだという表情でひとり頷く。

「そういう所をお役所がどうしようと元々、誰も文句なぞ言われんのだ。無条件に立ち退いて当然なもの、移転先の面倒まで見てくれるんだ。上等の上等」

オジイは、汚れ物を抱えて部屋を出て行った。

戸を開ける時、口をもぐもぐさせながら、どこか別の場所を睨むように不機嫌な顔で「河原乞食が」と言い放つたのを、トッコの耳が捉えた。

思いがけない、冷たい言葉。

しばらくじつと動けないままいると、オンバアが低い声でつぶやいた

「だけんど、それでもな。年寄りには。死ぬほどびつくりするような話さ。なあ」

五、チヨちゃんの災難

ヨシばあさんの五七日は生憎、ひどい雨になってしまった。トッコは朝から、学校が引けたら、国道を通るバスに乗ろうと考えていた。ほんのバス停四つ分の距離だけれど、お供物と衣装を濡らしたくなかった。

トッコが、学校帰りにコーちゃんに頼っていた磯道の案内を断らなければと考えていた矢先、滅多にないことだが、彼の方からトッコの教室を訪ねて来

た。

コーちゃんが入って来る時、帰り仕度をしていた同級生が左右にぱつと分かれる。教室を出て行く者もある。あとは遠巻きにして、様子を窺っている感じだ。

それというのも、トッコは慣れているから問題にしないが、コーちゃんの見かけが、あまり中学生らしくないせいなのである。上背が高くて、小柄な者を見下ろす。鴨居にぶつかると避けているうち、猫背で歩くようになった。小さくなつた上履きをかかとを踏んでずるずる突っ掛け、肩が左右に振れてだらしない歩き方をする。

コーちゃんはトッコの席まで無遠慮に立ち入って、来るなり「今日はオンバアが来るんだろな」と怒鳴つた。トッコは返事をせずムスツとしていた。五七日は自分が参じますと、事前に伝えておいた筈。実際オンバアの状態があまり良くないから、軽口を叩き返す気持ちにもならなかった。

コーちゃんはコーちゃん、トッコの素振りが気に入らなくて鼻に皺を寄せた。

「返事しろよ、コラ！」

ぼしんと、でっかい掌で机を叩く。その音に、周囲に居た何人かはビクツと首を引つ込めた。

「もう先(せん)から私が、つて言つてあるでしょ」

「オメエは下手だからヤなんだよ。ド素人だから」

たまりかねたトッコは、お返しに、分厚い辞書で思い切り机を叩いた。その音がまたすごい。教室中の視線が集中した。

「あなたに言われる筋じゃないわ、ばーか」

「なにお」コーちゃんが下顎をしゃくる。

一同に緊張が走つた。

トッコは普段は伏し目がちな目をつかつと見開き、ギロリと睨んだ。三白眼のトッコが睨み付けると、切り付けるような凄みがある。

「あんまり言いたくないけど。お師匠さんはこの頃うんと弱つて、立つことも出来ないし、食事も手伝わないと食べないんだよ。でも、そんなに私が嫌なら無理には行かない。別にこっちは困らないから。

こんな天気で、コーちゃんとはさ、急に追善供養やつてくれる宛があるんだか知らないけど、ヨシ

ばあさんの大事な忌日(きび)なんだからね。好きにすれば」

白々と言い返されて、コーちゃんは瞬きも忘れ口を開けたまま、暫く間を置いた。

そして、片方の眉毛を上げて、居心地悪そうに二の腕を搔きながらトッコを見た。

「ああ……と、そうだ。オメエに言いに来たんだ、磯は通れねえって。海が荒れて半端じゃねえから。国道、回んねえと」

「何、行かなくていいんじゃないか？」

「オメエにや今日の磯は無理だ。とれえ奴は流される、オレは平気だけど。言つとくけどよ、国道もとれえ奴は轢かれるぜ、気をつけろよ」

オンバアの事情を話した途端、コーちゃんが気を使ってへらへら喋るのが、トッコには可笑しかった。そんなに分からんチンでもないんだ、彼は。結構心配してくれてたりする。

トッコはちよっぴり、肩の力を抜いた。

「うん。私も今日はバスで行こうと思ってたんだ。荷物が多いし、いろいろ濡らしたくないから」

「そうか、バス。バスに乗るつてのものな。そうだな、バスがいいなやっばし」と、妙に感心し、指をひらひら動かしてリズムカルに二、三步後退しながら戻って行つた。

彼が教室を出て行つた後、離れた席の持田さんが、投げつけるように言つた。

「仲良いね」と、自慢の豊かな髪をかき上げ、鷹のような眼でトッコを見据えた。

「この前も一緒に帰つたでしょ」

「ああ？」

少し考えて、三七日にコーちゃんに磯道を案内させた時だと、トッコは合点した。妙な噂を流されると面倒だから学校の外で待ち合わせたのに、厭なやつに掴まつた、と思う。

まあ、確かに一緒に歩いていたら否定はしない。「今日はすごいね、堂々と入ってきたね」

さながらトッコの攻撃心を煽るかのよう。持田さんはわざとらしくおどけた振りで、フクロウのように首を傾けている。

「別に。コソコソする事でもないし」トッコは、顔

を上げないままで答えた。仕事絡みだ。やましい事も無い。

「すごいねー、磯横の子と付き合ってるんだ」持田さんと仲の良い別の女子が、わざわざトツコの机まで言いに来た。

男子が女子を尋ねて来た、というだけで、面白おかしく囃す輩がいるが、トツコはいちいち取り合わない。しかし、あまりにも厭味な言い方なので、今この場で殴りかかってやりたい衝動に駆られる。堪えろ、と、自身に向けて念じる。

平静を装おうとすれば、目や耳の内側が充血したのか圧迫される。

「彼氏？」

「あのさ。そんなふうに見える？ どうしてそうなる訳、くだらない」

拝み屋の仕事で、知らない家から依頼がある時、その家の者に道案内を頼む。そんな、ありきたりの事だ。他所の時、何も言われたことがないのに。まして会話は教室中に筒抜けだ、色気のない内容を聞いたはずなのに。トツコはきりきり奥歯を噛みしめ

た。腹から食道に塊のような熱いものがせり上がって来る。自分が二ツに裂けそうだ。でも、吐き出すまい、押さえ込め。

くだらない奴になんか、遊ばれてやるものか。動じてなるものか。あいつ等と、同じ程度に成り下がるものか。

路線バスの車内は混雑していたが、ちょうど降客があり、トツコはいいタイミングで座る事が出来た。前から順に回ってきた車掌に軽く手を上げて切符を買う。

「磯横まで」

若い男の車掌はトツコが出した小銭を切符と引き換えると、首から提げた大きいガマグチ式の鞆に収めた。

湿気で曇った窓ガラスを指で拭う。雨脚は強く窓にバラバラと打ち付け、視界は悪い。走り出すと雨粒が斜めに流れた。

バスは停留所ごとの乗降を繰り返し、利用者が多い市街地を出て海沿いの国道を走る。やがて、客の

数も段々少なくなつていき、トッコは冷たい窓ガラスに頬をくっ付け、降車の頃合を見計らつていた。

「次はア、いそよこしいそよこ。お降りの方はいらつしやいませんか」ゆるりとした口調の車掌のアナウンスを受け、トッコは「お願いします」と、手をあげた。

その直後のことである。「うあつ、子供がつ！」誰かが悲鳴を上げた。

その声の主を皆が振り返る暇もなく、バスは急停車の反動でがくと揺れ、客の多くはよろけてのめつた。

停留所までまだ五十メートル程もあるのに、手前で止まったのである。ある程度は減速していたものの、かなり乱暴な止め方だった。同時に、あちこちでブレーキの音がキキキイと鳴る。後続車もバスの動きに急停車したようだ。パーパー、ビービーとクラクションがけたたましく鳴って、たちまち国道は大騒ぎになった。

「何だ、こんなところに停まって！」と、荒げた声。と、間を置かず、別の誰かが外を指差して「子供が

倒れている！」と叫んだ。乗客たちは指差された窓の方にどやどやと張り付くと各々、伸び上がった窓を開けてみたりした。すると、バスの前方に、黄色い傘をさした子供たちの一団がいた。

「轢かれたのか？」

「お客さんすみません、ちよつとお待ちください。子供が前を走っていた車に接触したもようです」

運転手は乗客たちに向つて大声で言いながら、サイドブレーキを引いた。

「あたしや見たよ、青いトラックだよ」

「このバスじゃないなら、関係ない。こっちは急いでるんだ、早く出してくれ」

「運転手さん、トラックを追っかけなきゃ」

乗客たちは口々に騒ぎだした。

「待つて下さい、子供の命が先です」運転手は乗客たちを諫（いさ）めた。

ひよろりと瘦せた車掌は「様子を見えます」と言い残し、降車して雨の中へ飛び出して行った。

バスの扉はいったん閉じられたが、トッコは荷物を持つて出口付近へ進み、おそるおそる外を窺った。

傘や合羽姿の子供たちが五人、車道に座り込んだ一人を囲んで、塊になっていた。皆、交通安全協会から配られたお揃いの黄色いランドセルカバーを着けている。あのカバーを付けているのは一年生だ。バスの車掌と何か話している、見たことのある子供の横顔が見えた。磯横の長屋の子。

取り囲んだ子供たちの中心にいる赤い長靴。見覚えのある肉付きのいい背中が。(え……！ チヨちゃん？)

トッコは噴出した脇汗が、一気に冷たくなるのを感じた。

「運転手さん、大変。降ろして下さい！ あの、真ん中の子は友達の子みたいですよ！」

「何？ きみの知っている子か。よし、降りて」運転手は折りたたみ式の自動ドアを開けた。

他の乗客を分け、もつれるようにステップを降りる。そして、取り囲んでいた子供達に、急いでチヨちゃんの家の人を呼んでくるように言った。

チヨちゃんは、学校の先生の言いつけ通りに国道を歩いて、事故に遭ったのだ。普段はコーちゃんや上級生の後をくつついて、通学路として認められていない浜辺を通っている。

ただ、今日に限っては悪天候のため、特に低学年の子供は、事故防止のためグループ下校の指導となつたのだ。

一年生から三年生の子供を地区ごとに集め、二列に並べた。学校周辺では、歩道もあるし、子供の数も多いためこのやり方で良かった。しかし、子供達は学校から遠ざかるにつれて、枝分かれし散っていく。引率の先生も途中までの見送りで折り返し帰った。チヨちゃんのグループは、やがて、磯横に続く歩道のない国道に差し掛かった。

この道は一列で通るのが良策と大人なら思うだろう。しかし、一年生の彼らに機転は利かない。子供たちは並び直すことなく、教師に指導された二列のまま路肩を進んだのである。

海側を歩いてきた子が、車道側を歩いてきたチヨちゃんをふざけて突付く。身を振って避けたチヨちゃん

やんが車道側に膨らんだとき、後ろから大型トラックが、道幅いっぱいに迫っていたのが、分からなかった。

子供の列を追い抜きざま、ランドセル横のフックに掛けていた給食袋がトラックの積載荷物につっかかった。チヨちゃんは半回転して後ろ向きに尻餅をつき、その衝撃で、給食袋を掛けた真鍮の金具に強い力が加わり、ランドセルからむしり取られたのだ。一瞬の出来事。走り去った大型トラックの運転手は、この事態に気付きもなかっただろう。

バスの車掌は突風に飛ばされたチヨちゃんの傘を追い、崖下に落ちる直前に間一髪で掴まえた。

車掌がぶ濡れになって必死で拾ってきた傘を渡しても、チヨちゃんは座り込んだままポーっとしていたのに、トッコに気が付いたら途端に背筋が伸びた。「トツちゃん！」

車掌も走り寄るトッコに注目した。

「きみは？ お姉さん？」

「いいえ。でも知ってる家の子です」傘を半分、チヨちゃんに差しかける。

チヨちゃんが「痛いよう」と、半ベそかいて手を出すので、トッコは荷物を脇に抱え直し、片手でチヨちゃんのぺたぺた粘る指先を握った。

「どこ？ 痛い」と訊くと、腰を振り、濡れたスカートをはぐって太腿を見せた。左側の尻から腿にかけて擦過傷がある。

「頭は平気？ ぶつけなかった」

チヨちゃんは「痛い、痛い」と腿の傷を示す。

「大丈夫そうですね」車掌とトッコは頷き合った。

車掌はバスの運転手に向って、両手で大きな丸を作って見せた。運転手もそれを受けて同様に丸を作り、ホッとした様子。

彼はトッコに、ランドセルの側面を示した。

「金具が取れて良かった、引き摺られなくて。運が良かったですね」

三人が屈んで話しているすぐその脇を、バスを追い越した車がクラクションを鳴らしながら飛ばして行く。風圧で身体ごと持っていかれそうだ。気がつけないうちに新たな事故を起こしかねない。

「ここは、危ないです。バス停の待合所に移動しま

しよう」と車掌はこの先のベンチのある場所を指し、トッコも同意した。

「立てる？」

チヨちゃんは、しゃくりあげて「痛いー」と喚いたが、「少し歩くだけだよ。女の意地を見せなよ」ときつめに言うと、呻きながらヨロヨロ立ち上がった。「ね、きみ。この子を待合所に連れてって、家の人を迎えに来るまで、見てやってくれませんか。早くバスを動かさないと。道を塞いでるから」

「ああ。はい」

短時間でびしょ濡れになった車掌は、挨拶もそこそこに、走ってバスに戻っていった。

「発車オーライ」

水溜りのしぶきをあげて走り去る。

間もなくおばさんが、近道の階段をひとつ飛ばしで駆け上がって来るのが見えた。そのだいぶ後方に、応援を呼びにやった子供達の黄色い傘が続いて来る。おばさんは、真剣で怖い顔だったが、トッコからだいたい状況を聞いて、チヨちゃんの怪我の具合を

確かめると「こんくらいか」と呟いて、和らいだ顔つきになった。

チヨちゃんが「給食袋」と言うので、トッコが振り向くと、給食袋は雨に濡れ、他の自動車に轢かれ汚れて車道に取り残されていた。拾いに行こうとしたが、おばさんに止められた。

海は、長屋の玄関近くまで迫っている。波は岩に打ち付けて砕け、白いしぶきが泡のように飛び散っていた。

トッコが着くともうコーちゃんは帰宅しており、大人達と部屋の家具を端へ寄せている最中だった。悪天候のこともあり、法要は家の中で行う。隣の家との仕切りを取り外し、二棟分の細長い広間ができた。

チヨちゃんは帰宅後も痛みを訴え続けたが、おばさんは接待で忙しく、たかが子供の擦り傷などに構ってはられない。

とうとうおばさんにうそ泣きを見抜かれ「赤チンをまけてやるから」と、いなされていた。擦り傷には赤系金属光沢の赤チンがたっぷり塗られ、パン

ツに付かないように黒ちり紙が当てがわれた。

六、埋め立てに絡むこと

暗い海にせり出した堤防の突端で、新しく設置した灯台の明かりが回る。「いち、にの、ピカリ」という間隔で緑色に光っている。

港湾に灰色の大きな作業船が入ったのは、夏休みに入って間もなくのこと。巨大なクレーンが長い腕を伸ばし、いよいよ離岸に堤防を造る工事が始まったのだ。海を埋め立てて二十メートル道路を作る計画は、間違いなく実行に移される。

ヨシばあさんの五七日法要が済むとじきに夏休みに入り、トッコはお盆行事に忙しくなった。また、家に居ればオンバアの世話など、暇もない日々を過ごす。ヨシばあさんの七七日法要は寺で行なわれ、トッコは呼ばれなかつたから、休み中の磯横長屋の様子を知る由もない。

ただ、山の庵から海を見ると、沖にデンとクレー

ンが居座って、離岸堤を徐々に増やしているの、工事が進んでいる、という認識はあつた。

浜は、姿を変えようとしている。

遠く工事を眺めながら、トッコは磯横長屋に思いを馳せた。盆前の拌み屋の寄合の時、磯横では人が少なくなつて、共同作業をしていた塩作りを止めたと噂話のように聞いた。

コーちゃんの家はもう引越しを決めたのだろうか。市営住宅へ行くなら学区が変わる。仕事で呼ばれなければ会うこともなくなるだろう。その前に餞別代りの憎まれ口の一つも言つてやりたいものだ。転校先ではケンカは控え、目立たず地道に暮らせと。そんなこと、コーちゃんには所詮無理だとトッコは承知しているけれど。

やがて、二学期が始まった。

一番面食らつたのは、以前まで目の敵のように何だかんだと厭味に絡んできた持田さんが、帰宅途中ひとり歩いてきたトッコに、珍しく真剣な面持ちで話し掛けてきたことだ。後ろから走ってきて「一

緒に帰ろう」と言うなり、手を掴まれたのだ。何事かと構えていると、

「磯横の孝治さんと仲が良いよね。ね、彼は今、……生きてるの？」と言う。

トッコは「はああ？」と、声が出た。突然、何を言い出すんだか、この女。

「コーちゃんのこと？ あのさあ。殺したって死ぬようなおつちよこちよいじやないよ、アレは」

ところが、トッコがろくでもない返事をしていると見る間に持田さんの目に涙が盛り上がって、ぼろっと零れるのだ。

「え？ ……知らないの、うそ」

「知らないも何も、何があった？ 私は夏休みの前に会ったきりだけだ」

持田さんは心底、心細そうな表情だった。制服のエンジ色のネクタイを、所在無げに弄びながら、

「あのね、新学期始まってもう一週間経つのに、孝治さん学校に来てないのよ。噂だと、休み中にどうかして頭を打ったとか。テトラから落ちたとか、飛び込み失敗したとか、いろんな子がいるんなこと言

うから、もう……」

「なにそれ。先生に聞いたの？」校内で死人が出れば、校長が朝礼で何か言いそうなものだと思つた。

「まさか！ 他所のクラスなのに訊けやしないわ。変に思われるでしょ、興味持つてるって勘ぐられちゃう」興奮して持田さんの声音が裏返る。彼女が意識して可愛い子ぶっているかどうかは不明だが、言葉の語尾が異様に跳ね上がって耳障りだった。

「まあまあ。ちゃんと確かめてから」そもそも横磯から葬式が出れば、こちらら本業である。訊かずとも様子屋仲間経由でトッコの耳にも入るはずだ。

「陸上部のリレーで県大会出場を決めたのは、孝治さんのお陰なのよ。彼が二人抜いて、地区大会勝つたんだから」

「そう、活躍だね。すごい、知らなかった。陸上部入ってたんだ」

「陸上部は孝治さんを助つ人に頼んだらしいの。人が足りなくて。地区大会は盛り上がったのよ。でもほら、そのあと陸上と野球の日程が重なって、私たちブラスバンドは野球の応援に行かなきゃいけない

でしょ。新学期まで知らなかったの。孝治さんがバトンを落として、県大会は最下位だったんだって。かわいそう」

「…へえ」

「彼がいなかったら県大会に進めなかったくせに、陸上部の子は孝治さんのせいで負けたなんて、よくそんなことを言うよね。失敗にがっかりして、身投げして、鮫に食われて死んだって言う人までいるんだよ……。トッコちゃんなら、本当の事を知っていると」

『トッコちゃん』だど？

自分に対する呼び方が妙に馴れ馴れしいのがくすぐったいが、コーちゃんの心配をしている有様に、芝居気はなさそうだった。彼に興味を持って情報を集めたものの、真偽が定かでなくてやきもきしている。違うか？

成る程、と思ひ当たる。

「コーちゃんのこと、好きなの？」と言うと、たちまち耳まで真っ赤になった。

頬を隠すように両手で覆って。なんて分かり易さ。

可愛いとさえ思える。持田さんがこれまで執拗に絡んできたのは、お勤めの打ち合わせでコーちゃんと一緒にいたから、嫉妬されていたのか。

「私はほんとに知らないの。仕事上の付き合い、お得意さんの家だよ。もしかして勘違いされてた？役に立てなくてゴメンね。でも、鮫はないわ。この辺りの海に大きい鮫はいないもの。あと、飛び込みに失敗したなんて、考えられない。コーちゃんは海女でも一目置くほどなんだから。テトラから落ちるつても、一年生じゃあるまいし。発想が間抜け過ぎ」

持田さんは涙を溜めた切れ長の眦(まなじり)を、白い滑らかな指で拭った。

「それなら、何——」

不吉な残像を振り払うように、強く頭を振る。

「気になるなら、本人に会うのが一番早いよ。今からでも磯横へ行ったらどう？」

すると彼女は過剰に反応して、昂ぶってキイキイ声になった。

「だめ。だめ、何言うの。無理に決まってる」

親切で言ったのに、ここまで拒否されては。

トッコはやはりこの人とは相容れないと思って「それじゃ、仕方ないね」と踵を返すが、「待つて」と呼び止められた。持田さんは再びしおらしく睫毛を伏せる。

「恥ずかしい？ なんなら一緒に付き合おうか？」

「そうじゃない、違うの」身体から、振り絞るような声を出した。

大きな腫でじつと見詰められると、トッコは歩みを止めざるを得ない。

「誰にも言わないで。絶対に。そしたら訳を言う」

「う、うん。言わない」

「絶対？」眉間にしわを寄せて、辺りを見回した。

「口は堅い方」

周囲を異様に気にする。誰もいないのに尚、彼女は両手を添えて、トッコの耳にコソコソと打ち明けた。

「磯横の埋め立て工事のことよ。夜、お父さんの会社の人が相談している声が聞こえちゃったの。立ち退きしない家が邪魔で、工事が進まないって。磯

横から出ていかないなら考えがあるとか、専門の人を雇って脅かそうとか。小僧が生意気と言ったから、ああ、考えるのも恐ろしいわ。お父さんが、孝治さんに酷いことをしたんじゃないかと、心配で」

「そんな事、ある訳ないじゃない、考え過ぎ」人を巻き添えにして不安を煽る彼女を否定しながらも、どこか心の片隅で引つ掛かっているものがある。そう言えばこの人は、県から埋め立て工事を請け負っている地元業者のひとつ、持田建設の娘。

トッコは混乱した。単なる恋愛問題なら、打ち明ければ良いが、この話、本人に打ち明けなさいとは、ちよつと言にくい。

持田さんは恨めしそうにトッコを見上げた。

海を臨む空にぼっかり浮かんだ月の美しい晩。

ちよつど磯横の近くにお勤めがあったので、トッコは国道から海岸へと下りた。

以前は今時分の長屋を訪ねると、軒を連ねて煙々と灯りが見えたものだが、既に移転が済み窓が暗い家ばかりが目立っていた。

コーちゃんとかだけ話をしたいけど、チヨちゃんが付いて来たら何て言おう、勉強の話と言いつししようか等と策を練りながら行くと、都合のいいことに、岩場の突堤からひとりで投げ釣りをやっている後姿が見えた。夜釣り用のウキが光り、軌跡の残像をつくる。釣竿を振っているコーちゃんは、怪我や病気の様子も全く無く脳天気そうで、いつもと何ら変わりなかった。

「ちよつといい？ 話があるの」

和服の裾を端折って帯に挟み、岩場をよじ登るトッコを見下ろして、コーちゃんは頓狂な声を出した。「ばかオメエ、何やってんだ。あつ、危ねつ。そんななりでー。登ってくんよ」

「まあ、硬いこと言いつこなし」

トッコは突堤に上がりきると、手に付いた小砂利をばっばと払って、端折った裾を元に戻した。

「コーちゃんさあ。学校、来てないでしょ。飛び込み失敗して頭を打っておバカになったって、もっぱらの噂だよ」

「あつはー。何だそれ」

「鮫に食われて死んだ、とかね。だから私、生きてるかどうか確かめに来たんだよ。だいたい、学校に來ない理由は何？ こんな所で元氣そうに遊んじやうててさ。理由が分からないから、口の悪い子に言いたい放題言われちゃってるよ」

「ぼつかでー、あははは」

肩を聳やかして、コーちゃんはきゆるきゆるリールを巻いた。笑い声は、自嘲しているかのようだった。

「バイクの免許、取りに行つたのが学校にバレてさ。暫く家で反省しろって、そう言う事」

「ぼつ、何やってんの。学校の評判下げるかなあ、この時期に普通」

「進学組にや悪いけどな。オレ等に取っちゃ死活問題だからしゃんめえ」そして彼は、「役所の奴ら、ひでえオタンコナスだぜ」と、ぼそりと言った。

二十メーター道路の整備計画地の中に、まるですっぽりと納まっているコーちゃんたちの長屋。

ある日、いきなり役所の助役が来て、道路建設設計

画の日程を説明したという。親達は当初、住んでいるところを急に移れと言われても、それは無理だと断ったそうだ。

ここには塩作りの作業場があるし、磯は魚介類、海藻類の宝庫で、長屋の人々はそれで暮らしを立てているのだ。近くに、守ってきた墓もある。

コーちゃんは唇を真一文字に結んでリールを巻き取り、また竿を背に負い、鞭のようにしならせて糸を遠くに飛ばした。

「水を止めると言いやがった」

国道の下を通っている水道管。それは以前、浜に住み始めた住人たちが無断で市の親管に接続していたものだ。勝手に水を引いてメーターも付けず、水道代も支払っていなかった。

ここは昔、特別区だった場所だ。

医者も逃げ出す（ウツル）病に罹ると、皆やみくもに恐れ、兆候があるものを全て磯の納屋に置き去りにした。納屋で亡くなる者が多かったが、軽く済み、治る者も少しはいた。だが、たとえ治ってもこ

の地区から出る事を許されなかった。

やがて、そういう人達だけの集団居住地が出来た。国に力がない頃のこと、何処に誰が住んでも見ぬふりで放って置かれた。（ウツル）と言って分けられた地区。役人でさえ忌んで立ち入らなかつたから、大抵の事は黙認されていた。水道のことも、無認可の塩田や、自家醸造酒の製造も。

ウツル病気の流行が下火になって、年を経て良い薬も出来、磯横の人々が健康を取り戻して一般と交流するようになってもおかれ、長い間放っておかれた上水道。

それを今頃になって、市は話し合いの切り札に持ってきた。

役所の助役は、油っぽい額の髪をつるりと掻き揚げ、狡猾そうにニヤリと笑った。近々水道の元栓を止めることになったが、引越するなら退去まで待ったうえ、今までの代金はチャラにしてやる、と言う文書を提示してきた。その代わり、指示通りに立ち退かなければ、明日にも長年の水道代を取り立ててやるとうそぶいた。ほんの少し前まで、頭かな差

別、屈辱を甘んじて受けていた人達に、あまりにも強引なやり方だった。

「他の家は、いくらか立退き料を貰ったみたいだ。家は、親父がなかなかウンて言わねえから。脅されたんだ」

「ひどい……」

トッコも唇を噛む他は、成す術なかった。

「役所の言う期限内に立ち退いた家は、優遇してくれるって言ったんだ。替わりの家は、良い所から早い者勝ち。市営住宅に入るなら、抽選なしで、電話と湯沸かし器も付けましようって。きつと、便利でいい生活が出来るだろ。死んだばあちゃんだって、気に入ったろうに。隣の家なんか、一番に判を押したらしいぜ。それが、クソ親父が屁理屈こねて渋るもんだから、どんどん条件が悪くなつて。後は追い出されるだけ。やつてられるか」

長屋の人々は一軒、また一軒、引越し荷物を車に積んで、街の中へと消えていく。それでも、コーちゃんのお父さんは、過去に置き去りにされた人々の

墓や、長い間差別と偏見を生んだ事実を、新しい二十メートル道路の下、埋めて隠して終らせようとする役所のやり方に我慢ができなかったという。

「オレに言ってもしょうないけどって、ばあちゃんがつぶつぶ言つてた。死んだのも心労だ、心労。そういうのはさっさと決めちまえば良かったよ」

家の中でも、女たちは磯横を諦め、条件が良い内に移ろうと言つたのに対し、父親は譲らなかつた。度々この話題に触れて激しく言い争い、手が出ることもあつたと言う。

「オレは磯横が好きだ。でもな、新しい道路作りは、しようがないって思つてるんだぜ」コーちゃんは海を向いたまま言つた。

「何で？」

「チヨが怪我したのも、歩道がなかつたからだもんな。運が良くて、軽いキズだったけど、一歩間違えば轢かれてぺちゃんこだ。磯は、チヨみたいな鈍くさい一年坊主が通るにや本当はキツイ。俺らも小っちゃえ頃は跳びきれなくて海に落ちたり、流されかけたたりしたしな。もし、国道にガツチリした、ガー

ドレールのついた歩道があれば、安心して歩けるも
ん。それから、上の崖がくんで、人が何人も埋まっ
たのも知ってる。いつかは直さなくちゃなんない道
だと思う。オメェんち、ジイさんも、昔酷い目に遭っ
たクチだろ」

トッコは頷いた。

オジイが崖崩れに巻き込まれた話は、子供の時分
から聞かされていた。特にひとりで磯横へ使いに出
される時、体験談を交えて注意されたものだ。

オジイがまだ若い頃、妻と二人、車で崖下を通つ
た時のこと。ばらばらと小さな落石を見たと思つた
直後、凄まじい轟音と共に土砂が崩れ、目の前が真
っ暗になったそうだ。車は埋まりながら磯の下まで
流された。狭い車内でぶつかりながら回転して天地
もわからぬ。幸い車は比較的土砂の上の方にあつて
早く掘り出されたが、それでも生死を彷徨うほどの
大怪我をした。痛ましいことに、同乗の妻とは死に
別かれてしまった。他に、幾人も犠牲になった。

怪我の後遺症でオジイの足は左膝が曲らなくなり、
拇指を失う。肩も痛めて重いものが持てない。それ

までの勤めは辞めざるを得なくなつて、あとは職を
転々とした。

断崖の、荒く削られた岩肌は雄々しく、風光明媚
な一面を持つ。だが、決して近付いてはいけない。
いつ崩れて災害をもたらすか分からない、危険性を
孕んでいるからだ。

「オレはここが好きだ」

海面上のウキが、僅かに潜つたのを見て、コーち
ゃんは一度竿を倒し、再び立て直した。糸が突つ張
つて気まま勝手に波を切る。仕掛けに何かが掛かっ
ているのだ。

「よつしやあ」とコーちゃんは大声を出した。

どんどんリールを巻き、糸を手繰り寄せていく。

トッコも深くしなる竿の先にある暗い海を見た。

「ここが好きだけど、たった一軒残つたってどうに
もなるもんじゃねえ。親父の言う事はオレには解ら
ねえ。つと、つとつ。やった。アオリだあ」

「うわ」

引き上げた糸の先に二十センチほどのイカが掛か
つて、エンペラや足を動かしている。取り込むとき

墨を吐かれたが、コーちゃんは上手にかわした。イカをバケツに投げ入れる。

「親の留守にオレがハンコを持ち出して、役人の言う所にぼんぼん押ししてやった。もう、親父の意地になんか付き合ってらんねえからよ」

「そんなことして、おじさんに叱られなかったの」
コーちゃんはもう一度、竿を振って釣り糸を投げた。

「ああ。じきにバレて、殴られてよう…。予想はしてたぜ。ただ、母ちゃんが庇うんだな、オレを。母ちゃんが殴られるのは、見ててたまんねえ。オレは絶対、女は殴らないね」

「じゃ、ハンコを押した用紙、おじさんが取り戻しに行った？」

「いや。それで通った。役所はオレ等が邪魔だったもん、せつかくの書類だよ。返す訳ないじゃん。親父が何言ったって門前払いだよ。少なかったけどな、いくらか保証金が出たから、親父を失業させた罪滅ぼしに、バイクを買って商売をやるうとしたんだ。そしたらな、バイク屋が先に免許が要るって言うじ

ゃんか。それでよ。ちようど夏休みだから免許を取りに行こうと。な。思ったんだよ。思ったんだけど、うう、ちきしょう。何の間違いだか、陸上のリレーが、県大会まで行けちゃったからさあ。中体連で。アンカーのオレ様としては練習、抜けるに抜けれなくてよう。免許取りに行ってる暇がなくて。それ以上勝つ訳にはいかないってんだ」

「えつ。コーちゃんつてば、…何やってんの」

「中坊で免許取れる訳ないと思った？ 歳はいいんだ、オレはダブってるから」

「違うよ。県大会でバトン、…わざと落としたね」

「テトラで頭を打って、すっかりバカになったからな。そういうことにしとけ」

「大ばかだよ……」

コーちゃんは、背を向けそして、引き彎るように笑って見せた。きつと、追い詰められていたのだと思つた。コーちゃんの背中が少しだけ可哀想になつてしまう。トツコはわざとらしく、エヘンと咳払いをして。

「そんなおばかなコーちゃんですが、コーちゃんの

ことを気にかけている、健気な女の子がいまーす。
蓼食う虫も好き好きだよ、信じられないね」

「誰。オメエ？」

一瞬の間、慌てて否定。

「ブー。外れ」

「誰だよ、早く言え」

「恐れ多くも、持田建設社長令嬢さま」

「うっ、うそっ。持田ジュンコか」

「うーん。はつきり言った訳じゃないけど。一週間も学校に来ないのをすっごく心配してるよ。勘違いだったらゴメン」

コーちゃんはヘルメットをかぼつと被った。おもむろにバイクに跨り、磯横から国道への細い未舗装道路でエンジンをやたらにふかす。

「停学あげたら学校、復帰するぜー。心配掛けちゃまったようだから、今からちよいと挨拶してくるな。もしかして、オレ、持田様と深い縁で結ばれてるのかもね。サンキューな、拝み屋。お礼にアオリ持つてけよ。バケツは明日でいいぜ」

ちよつとキザっぽく、気取って親指を立てた。

立ち去りざま真っ白い排気ガスがトッコを包み、

コーちゃんのバカ笑いだけが耳に残った。

「ぼつかやろー、おまえなんか死んじまえー」

いくらバカ笑いしたって、叫んだって、波の音がみんなみんな、かき消していく。それが痩せ我慢だなんて、トッコ自身認めたくもなかった。

七、看取る

拝み屋のオンバアがいよいよ良くない。病状に変化がないと入院していた病院から出され、たまに庵に保健婦が血圧を測りに来るようになってから、既に数ヶ月が経っていた。それでもオンバアはうつつすら目を開けて、弱々しく唸るような声を出し、トッコのことが分かるようだったし、いくらか果汁を飲んだし、重湯も僅かずだが飲み込むことが出来た。それが、段々飲み物も嚥下しにくくなり、往診の先生が打ってくれる栄養の注射に頼るようになる。薄目を開いても反応が鈍い。やがて保健婦が、尿管

にカテーテルを通すなど、排尿もままならなくなつた。オジイは夜もオンバアの隣で眠り、毎日寄り添つて暮らした。

時折「えっえっ」と咳にならない音を出し痰を詰まらせて苦しみ、オジイが医者から借りた器具で吸引して取り除いてやるのだが、そういう行為自体がとても辛そうで、トッコは手伝いながら目をそむけることもしばしばだった。

だが、オジイはもう入院はさせないとトッコに言った。病院で検査すると憔悴してしまう。それが可哀想で、見ていられないからだ。

そんな日々を繰り返していたある日の夕刻。学校から帰つたトッコは、狭い玄関に入りきれないほどの大勢の履物を見た。それは、何かこれまでの日常と違うものを予感させた。

病人の傍らを固める面々はオンバアに馴染みの親しい人々だが、押み屋、泣き屋、葬儀屋、オッサンと、まるで次の段取りへの用意周到という趣。オジイが思わず失笑したのを、トッコは顔を上げないま

ま気が付いた。笑い？ いや、嗚咽が漏れただけかも知れなかった。

世間話が一頻り、それから長い沈黙の後。

「抱いてやるべえか」

押み屋の総代が言った。

オジイはただ俯いて、首を、縦にも横にも動かさなかつた。とても静かに、時は流れた。いよいよそんな風に、話が決まったようだった。

「トッコ、あっちへ行つておれ」オジイが言う。

「はい」

トッコはこの座に留まることの恐ろしさから逃れたい気持ちがあつて、素直に従つた。

鯛(ひぐらし)が啼く。

なんだか腰も落ち着かず台所でそわそわしている
と、泣き屋のおシイさんが来て、

「おばあさんあげる、水を一杯貰うよ」と、流しに出ていた普段使いの曇つたコップを手に取つた。

「あ、おばさん……」トッコはおシイさんの動作を止め、食器棚から量産品だが新しいコップを取つて、

ジャブジャブ洗った。

柄杓で水を注ぎ入れ、目の高さには持てば、こんな時でも水の粒が美しく光る。トッコは両手を添えておシイさんにコップを頼んだ。込み上げてくるものを、唇を噛んで唾と一緒に呑み込む。床に落ちたのは、コップから滴(したた)れたひとしずくか。

鯛が啼く。煩わしいほどに。

元気な頃のオンバアに、口癖のように言われ続けた言葉を、流しに寄りかかってトッコは回想した。

『なあトッコ。心して拝め。仏さんに極楽への道を開いてやらねばな』

鐘を鳴らし、団扇太鼓でリズムを刻んで。

オンバアは小柄なのに、その声は低く腹に響き良く通り、お経は迫力があつた。どうやったたらあの説得力のある声が出るのか、トッコには真似も出来ない。幼い頃はお経を語(こと)らんだだけで褒められて得意になっていたものだが、最近はそのだけでは不足と解るようになった。コーちゃんに素人っぽいと言われるまでもなく、自分の声が薄っぺらいの

は十分に自覚している。

『一所懸命拜んでやれば、仏さんはこの世の未練を断ち切つてな、すっかり安堵して旅立つことが出来るよ。拝み屋はそういうお役目よ』

中途半端にすれば自分が引きずられるぞ、とも言つた。

「極楽への道、か」トッコは唇を尖らせた。壁に掛けたアプサラの拓本の額は、樂しげに舞い踊る天子の姿。

ふと背後に気配を感じ、ゆつくりと肩越しに見る。「お師匠さん……」 どうしてそこに。トッコは目を瞬いた。

丸い顔を覆う白い髪、少し猫背の小さいからだ。台所の隅に座して、優しい眼差しをトッコに向ける。そのくせどこか浮遊しているような、はかなげな様子に戸惑う。

「どうしたの？」

いくら訊いても首を傾げても、台所の隅のオンバアは、ただこちらを向いているだけだ。トッコはたまらなくなつて大好きな匂いのするその手を掴もう

と、手を伸ばした。すると、姿はたちまちぼんやりとして、トッコの手は空を泳いだ。そこにいたはずのオンバアの姿はただの勘違いだったかのように、跡形もなくなっていた。

逃げてはだめだと、トッコは思った。お師匠さんを迷わせてはいけない。

トッコが障子を開けた時、末期の水が、オンバアの口元を濡らして光っていた。顰めた顔で目を閉じ、途切れがちの浅い呼吸に痰が絡んで雑音を出すのが、弱々しすぎて咳にならない。

「大丈夫か」総代はオジイに問うた。

苦しみがひどく長く続いて、手を尽くしてもどうにもならぬ。本人も家の者も疲れ果て弱りきっている。そんな、可哀想を通り越してしまった寝たきりの病人を楽にしてやりたいとき、拝み屋は辛い日々を終止符を打つ役割を頼まれることがある。

その依頼が来ると、「それだけはトッコにやらせられねえ」と、オンバアは引退間近だった頃も、無

理をして出張っていた仕事。けれど、トッコはオンバアの送り迎えに障子の後ろで待機していたから、おおよそは分かっている。

拝み屋の総代が白い袴姿の正装で、衣擦れの音をさせながら部屋中央に進み出るとき、オジイは畳に拳をついて、深く深く、禿げ上がった頭を下げた。トッコも正座してオジイに倣(なら)い、頭を下げた。

「ここへ来て、理趣分(シシブン)をあげてやりなさい」と、トッコをオンバアの枕元に導いた。理趣分は大般若心経五七八巻のことである。トッコは合掌し、心を込めてシブン経を唱えはじめた。

望みの水を与えて抱き起こし後ろから背を支えようと、首を垂れてこと切れ、間もなく落命する。

抱き起こして、送ってやる。その最期を安らかだと思ふ人もいるし、これは違うと感じる人もおそろくいるのだろう。

縁あって、トッコはこの家に迎えられた。本当の血縁ではなくても、育んでもらった。受けた恩は、

忘れない。教えを守り、拝み屋を継ぐ。

軽く握ったオンバアの片手に、菩提樹の数珠を持たせた。トッコがもう一方の手を取ってさすると、しわしわでびっくりするほど軽く、骨張って、そしてまだほんのり温かかった。

きつく目を閉じて、つばを呑み込む。ゴクンと咽が鳴った。涙が溢れ全てが滲んでいる。

「はあううう」両手で口許を覆っても、息をすると声が漏れて仕方がなかった。

拝み屋の総代は若衆を連れてきて、箆笥や鏡台を移動させ、板戸を外して部屋を広げた。女衆が雑巾掛けを済ませた所から、葬儀屋が白黒の幕を張り巡らせてまわる。人寄せの食べ物心配は、泣き屋のおシイさんが相談に乗ってくれた。

葬儀に関しては皆が皆その道のプロだから、段取りに過不足なく滞ることもない。それはとても心強いと思う反面、取り乱してもいなされそうで、胸が塞がるのだった。

八、背に月

それから数年後。

火花が上がる。ばん、ばん、ばらばららら。

二十メートル道路の完成を祝う火花だ。離岸堤防の内側に作った埋め立て地上空に、華やかな火の華がいつぱいに広がる。ヨットを係留してお洒落なカフェも作って、かつてここで暮らした人々の足跡を無かったことにして。

トッコは棚参りの帰り、公園に夜店が出ているのを見て、賑やかさに引き寄せられるようにスクーターを向けた。

仏事の出で立ちなので遠慮して遠巻きに眺めていたら、人混みの中に偶然、きれいな浴衣姿の持田さんと、アロハシャツを着たコーちゃんを見つけた。提灯飾りの赤い光の中で、二人、仲睦まじそうに連れ立っていた。声は掛けなかった。

沈黙の闇を肩越しに振り向けば、月がスクーター

を操るトッコの背を照らしていた。

『帰ろう。オジイが待つてる』

山際に浮かぶ橙色の満月は、トッコを独り立ちま
でに導いた、オンバアの笑顔のようだ。

この足下を照らすほどには明るくないが、頬と頬
をそっと触れ合う時のように、ほのかに温かい。暗
い藪を進むトッコは月に護られている。ひとりでも
心細くはない。これからも。

その貴い眼差しを、背に受けて歩くのだから。